

(英) Belief

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43384

信念 しんねん
〔英〕 belief

信念とは何であるかを理解するには、ある特定の信念が存在しない場合、もしくはその特定の信念が偽である場合に、あなたの身にどんなことが生じるかを考えてみるのがいいだろう。それによって、信念の正確な定義は手に入らなくとも（そんなものはまだない）、信念というものの存在を

改めて知ることができる。

この田舎町に到着する特急列車は毎日午後1時の1本だけだ、ということをあなたが信じていなかったなら、あなたがその時刻に駅で家族と会っていることはなかったであろう。あるいは、その信念が間違っていて列車の着く時刻が午後3時だったなら、やはりあなたが午後1時に駅で家族と会っていることはなかったであろう。信念はこのように、われわれの行為を導き、行為の成功・不成功に大きく関わる。なぜ信念にそんな役が果たせるのかというと、それは、信念が環境世界の情報を担っているからである。したがって、信念は、環境世界のありのままの情報を伝えているか/否かに応じて、真/偽という意味論的な評価を受ける。しかし、行為を導くのは、このような事実に関する信念ばかりではない。例えば、「仮に歩いていったら駅に1時には着かないだろう」といった仮想的事態や、「仮に犬のジョシュアの具合が悪くなっていなかったら家族は今日は来なかっただろう」といった反事実的事態に関する信念もまた、あなたの行為を導くはずである。もっとも、このような場合の信念の真偽は、いまなお哲学的論争の種である。

信念がこのように行為者の認知的状態として実現されるからには、その存在は最終的には行為者の認知メカニズムの一部として、例えば人間の場合には、神経生理学的な基盤組織によって実現されているであろう。しかし、異星人やロボットもまた、人間のような神経生理学的な基盤組織はもたないだろうが、ひょっとすると「地球は丸い」という信念をもつかもしい。その場合、信念は、〈認知メカニズムにおいてしかじかの機能を果たすこと〉によって機能主義的に定義される心的表象の一種ということになるだろう。さて、その心的表象としての信念は、どのような性質をもっている、あるいはもつべきなのだろうか。

信念の本性については、21世紀初頭の現在、2つの基本的な考え方が認知科学の経験的仮説として争っている。その1つは、信念が生じることを、〈思考の言語 (language of thought)〉という心的表象が認知メカニズムの適当な場所（「信念ボックス」などと呼ばれる）に生成されることだと主張する。それによれば、信念とは本質的に言語的な構造をもっており、その構文論的および意味論的な特徴によってのみ、信念や思考の特質である体系性や産出性が説明できる。ポイントは、信念が持つとされる合成性 (composition-

ality) にある。この古典的計算主義といわれる考え方では、なぜ信念の本体が日本語や英語のような自然言語ではなく、人間に共通の〈思考の言語〉という仮説上の表象なのかという理由は、母国語の異なる人々がそれにもかかわらず「明日は嵐だ」といった信念を共有したり、交換できるという事情にある。したがって、この考えを延長していけば、犬や猫も、それが何かを信じているとされる限り、〈思考の言語〉を頭を持っていることになる。

他方、心的表象に関するもう1つの考え方、コネクショニズム (connectionism) によれば、信念という心的表象は、まったく言語的構造をもたない。この主張では、信念は、神経細胞のネットワークにおいて実現される興奮パターンである。例えば、ある信念「他人に迷惑をかけなければ何をしてもいい」を構成する表象「他人」はネットワーク上の多くのユニットにおいて分散化されているだけでなく、同時に、「迷惑」や「いい」といった他の表象とも重ね合わされて存在している。したがって、信念が本当にこうしたネットワークによって全体論的に実現されているのなら、信念はいわゆる語彙からも文法からも構成されていないのだから、むしろ、信念が言語によって過不足なく完全に表現されると考えるのは錯覚だ、ということになるだろう。

コネクショニズムとなじみのよい伝統的な信念のとらえ方は、信念を言語的ではなく、絵画的もしくは地図的とする見方である。例えば、「都市Cは都市AとB両方の東にある」という信念pは、絵画的である限りにおいて同時に、「BはAの東にある」〈A, B, C〉という信念でもあるか、「AはBの東にある」〈B, A, C〉という信念でもあるかのいずれかであって、pの言語表現がそうであるように、そのいずれかに関して未決定〈?, ?, C〉ということはない。また、この信念pは、言語でそう表現されなくとも、同時に「AとBはCの西にある」という信念でもある。

●柴田正良

【関連項目】言語、意味論、ネットワーク

【主要文献】Clark, Andy, *Microcognition*, Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1989 (野家伸也・佐藤英明訳『認知の微視的構造』産業図書, 1997)。戸田山和久・服部裕幸・柴田正良・美濃正嗣『心の科学と哲学—コネクショニズムの可能性』昭和堂, 2003。